

きらめく陽光を通し、鮮やかに教会の窓を飾るステンドグラス。それは、文字を読めない人たちにも、神の教を絵物語として伝えるための厳かな演出だ。ステンドグラスの起源は、古代ローマ時代で“ステイン=着色する、染め付ける”が名前の由来。焼き絵を施したガラスという意味を持つ。それを教会が装飾窓として採用したことで、ヨーロッパ各地へと広まった。現存する最古のステンドグラスは、アルザス地方のヴィッサンブール修道院にある11世紀に作成されたキリストの顔である。その後、ステンドグラスはフランスにおいて、建築窓として大きく発展を遂げていく。ロマเนสク美術、ゴシック美術などの建築技術の向上とともに、ガラスに鮮やかな絵付けをする技術を高めたステンドグラスが、教会を光の色彩に満ちた空間へと変えて



ルイ・コムフォート・ティファニー  
「ランプ きぼなふじ」  
(北海道立近代美術館蔵)

いった。そんなステンドグラスを、さらに室内装飾品として普及させたのが、宝飾品のブランドメーカー、ティファニーだ。

19世紀のアールヌーボー期、アメリカのルイ・C・ティファニーは、画期的なステンドグラスの技法を考え出す。それまでステンドグラスは、鉛のレールにガラスをはめ込んで作成されていたため、大きなガラスの組み合わせしか使えず、窓などの平面表現が限界だった。そこで着目したのが“銅”。銅の柔軟で加工性に優れた特性を活かし、ガラスの縁

## ステンドグラスを 平面から曲面に変えた銅

を薄い銅テープで巻き、はんだ付けしたのだ。これにより“小さなガラスを幾つも自在につなぎ合わせて、複雑な曲面を表現する”ことに成功した。銅テープを使うことで、ステンドグラスの美しい輝きは、立体的な室内装飾品の世界にも広がっていったのである。



一枚のガラスでも場所により微妙に色彩が違ふ



銅テープは、専用のものが市販されている



一つひとつのガラスに根気良く銅テープを巻く



明かりを灯すと、作品は別の表情を見せてくれる

では、どのようにして銅テープを使うのだろうか。甲府市内でステンドグラス教室を開く小菅静穂さんにお話を伺った。

「まずは、設計図となる型紙に合わせ、ガラス板からイメージした色彩のガラスピースを切り出します。これを型紙の上に乗せて、つなぎ合わせていきます。その際、ガラスピースを銅テープで丁寧に巻き、はんだ付けします。単純な曲面なら鉛でも可能ですが、ランプシェードなどの立体的な曲面の作品は、細かなガラスピースをたくさん組み合わせますので、銅テープでなければうまく加工できませんし、仕上がりがより美しくなります」

そう話しながら、ガラスピース一つひとつに愛情を込めて銅テープを巻き続ける小菅さん。テープは、厚さ0.05mmくらい、幅は3.5～

6mm程の各種。フラックスを塗り、はんだを溶かすと銅テープと自然に接合していく。最後にブラックパティナーと呼ばれる薬品で黒く仕上げて完成。小菅さんにとって、ステンドグラス作りの魅力とは。

「ステンドグラスは、光を通した時、通さない時、それぞれの美しさを同時に表現することが大切です。一枚一枚ガラスを光に透かしながら、ここだという箇所色彩のガラスピースを選び、切り出していきますが、なかなか自分のイメージ通りの完璧なものではできません。この難しさが、次の創作意欲をかき立ててくれるのです」。



小菅さんの工房兼、教室でもある  
「アトリエ ヴィジュ」